**敷石遺跡**

１９６０年（昭和３５）畑の耕作中に、土器と石斧が見つかったのをきっかけに、慶応大学考古学研究室によって発掘調査が行われました。敷石の名のように３０㎝四方のものと、１５㎝四方の二種類の敷石が見つかり、炉の跡もあったので当初は縄文時代の住居跡と考えられました。

しかし、その後の調査で土器や土偶、石器が多く出土しましたが、その土器に実用性がない小型のものが多いことから、住居跡というより祭祀場所の跡と考えられました。調査後は埋め戻されて畑になっています。

**八塚古墳**

　１９６５年と１９７３年に平塚市による八塚古墳の発掘調査が行われました。八塚古墳は、古墳時代のものと考えられていますが、大小の自然石で石室が構成され、棺を安置する玄室と外部をつなぐ通路も備わっていました。玄室の天井には大きな自然石が二枚置かれ、内部はすこぶる丁寧な造りになっていました。出土品は古墳時代の直刀、ガラス玉、、、などですが、これらは副葬品と考えられています。

**宗海寺跡**

　宗海寺は明治の廃仏毀釈で廃寺になった寺である。創建時期は不明だが、石仏に記された年代から推定すると江戸前期と考えられる。新編相模風土記稿には「羽黒行人派修験　江戸霊岩島普門院配下　本尊大日」と書かれていて、山伏の修験寺と考えられる。本尊の大日如来は延命寺に安置されている。跡地には石造の大日如来、地蔵菩薩、羽黒山の石の小祠、墓標が散在していた。昭和６０年に地元の有志１２名が、これら石造物をまとめ造成した。廃寺になった後も、毎年９月の彼岸に山田屋敷自治会館に集まり念仏講をしている。

**泣き石**

　平塚の民話昔ばなしに書かれている吉沢の民話で、鎌倉時代初めの話です。土屋の土屋三郎と豊田には豊田次郎という領主がいました。二人は頼朝につかえて仲良く助け合っていました。次郎が父の塚（お墓）を造る事になり、塚の上にのせる形の良い大きな石が見つからないので三郎に相談しました。とりあえず塚が出来るまで、上吉沢の八塚の石を次郎の屋敷に置きました。夜も更けたころ「ウエーン、ウエーン」と泣き声が聞こえてきました。泣き声が何日も続き、家の人たちは寝不足で病気になってしまいました。泣いていたのは、ふしぎな事に上吉沢から運んで来た八塚の石とわかりました。次郎は三郎にわけをいって、もとの八塚へ返しました。そのようなことから、この石は「八塚の夜泣き石」と呼ばれるようになりました。

**山王社**

地元では「山王さん」と呼ばれているが天保年間、江戸幕府が編纂した新編相模風土記稿には「山王社　村持」と書かれている。古老の話では山王さんは八剱神社より古いと言われている。昭和１０年代ごろまでは、祭りの日に大きな笊に菓子を入れ子供に配っていた。現在は四月に八剱神社の宮世話人が清掃、お参りをしている。周辺には庚申塔や大日如来等の石仏がある。大日如来は一見すると観音様のような優美な姿だが、智拳印を結ぶ金剛界の大日如来である。１７１１年（宝永８）六十六部供養のために建てたとある。

令和3年9月

吉沢地区自治会連合会

吉沢地区地域運営協議会

吉沢歴史クラブ